



▲庭から座敷をのぞむ 池水・滝組や大石を配し、回遊式に玄関先まで続いている。



▲南門につるされた籠 昭和58年3月、前当主が山口家の由来を説明板に記している。



▲狭山藩主北条氏宛の書状 右が北条伊勢守、左が北条遠江守宛。



▲山口家住宅 (天美我堂4丁目) 山口家正面に向かって左側の扉に高札場があった。

東我堂村庄屋として狭山藩北条氏の下、村政に関わる

江戸時代、現在の天美我堂は丹北郡西我堂村と東我堂村に分かれていました。天美我堂七丁目の善正寺(真宗大谷派)東門前の水路(現在は道路)が東西両村の境界となっていました。代々、西我堂村の庄屋は西川家(歴史ウォーク99)がつとめていましたが、東我堂村では山口家がありました。両村は、宝暦八年(二七五八)より北隣の芝村(天美西)とともに、狭山藩北条氏一万石の領地でした。

このうち、天美我堂四丁目の府道我堂一金岡線の西側、府道大堀一堺線に面する山口家は、江戸時代後半以降の庄屋建築です。土間や土間添いの二室は今から二百数十年前の十八世紀中ごろに建てられたと考えられています。竹で編まれた高い天井を持ち上げるように丈夫な梁が支えています。江戸時代、村全域に打ち鳴らした太鼓や明治初年に住宅北側の高札場に掲げられた太政官札も残されています。座敷や仏間などは、天保年間(一八三〇〜四三)に改築されたと言われ、入口は現代になって再建したものです。

座敷から眺める庭園は江戸末期、明治初期に作庭されたと考えられます。屋敷祠や石組・春日灯籠が植え

込みの中に調和しています。

山口家は、過去帳や墓石銘によると、鎌倉時代の正治二年(一一二〇)八月二十五日から書きおこし、間をおいて、戦国時代の天正二年(一五七四)九月に亡くなった忠五郎から今日まで脈々と続いています。

とくに、天明六年(一七八六)八月、八十九歳で往生した新兵衛は狭山藩北条氏の財務の一担を援助したと伝えられています。山口家の南門の天井に籠がつるされています。もともと、ここには四棟の米倉が建っていました。明治時代以降、今のように門としたものです。新兵衛らは、江戸時代後半以降、この籠に乗って狭山池(大阪狭山市)のほとりにあつた狭山藩の陣屋に参勤したと伝聞されています。七代藩主北条遠江守氏彦から、十二代相模守氏恭の幕末まで続いたようです。

山口氏と狭山藩主北条氏との接点の中で、山口家に二通の藩主宛の書状が額装されて大切に保管されていることに興味をそそがれます。一つは、熊本藩の細川越中守が北条伊勢守に宛てた二月の書状。もう一つは、豊後(大分県)日出藩の木下織部が北条遠江守に宛てた十二月の書状です。いずれも年は記されていませんが、細川氏が四代伊勢守氏治へ、また木下氏が九代遠江守氏喬へ差し出した私信と思われる。東西我堂村

や山口氏との関わりはありませんが、同家に代々、受け継がれてきたものです。

明治十三年(一八八〇)六月に書かれた東西我堂村の檀那寺である善正寺に残る『善正寺寶物古器物古文書目録』の中にも、藩主が書いたと伝える扁額(へんがく)があげられています。嘉永六年(一八五三)、前年に継職した十一代美濃守氏燕が同村を巡見した際、善正寺の山号である「天見山」としたためたと言われ、本堂正面に掲げられています。

嘉永六年時の山口家当主は、定一郎でした。定一郎は明治後半まで活躍しましたが、定一郎の祖父の市郎兵衛も文化九年(一八一二)、氏の我堂八幡宮に狛犬を奉獻し、本殿前に現存しています。同時に、西鳥居も市郎兵衛らが奉獻したものでその名が刻まれています。

近代になっても、定一郎の孫の為三郎は明治後半から昭和初期までの二十年の長きにわたって天美村や布忍村の村長をつとめていました。その間、我堂八幡宮本殿前のメ石を大正四年(一九一五)十一月、大正天皇の御大典記念として、西我堂の西川氏と共に寄進しています。また、神社の西側、府道に面した善正寺に向かう旧道の南側にも石堂に祀られた地藏尊を講の人たちと共に寄進したのです。